

『パンセ』 写本研究

湊 野 正 満*

要 旨

『パンセ』の写本研究史において、ジャン・メナールが仮説として提出した第1写本と第2写本の親写本であるゼロ写本の存在は、第1、第2の両写本の比較研究と精緻な推論に裏打ちされていて、誰も疑いの余地のないもののように思われてきたが、実際誰もゼロ写本の存在を知らないし、実物も見ることがない。2018年3月に公開した「Introduction aux études génétiques sur les Copies des Pensées de Pascal」において、筆者はゼロ写本に関して別の新しい仮説に到達し、この仮説に導かれてゼロ写本の一部を初めて発掘し提示することができた。

小論では、こののち新たに発掘したもののうちの一部を紹介する。

キーワード：パスカルの『パンセ』、『パンセ』草稿、ゼロ写本、第1写本、写本群の成立過程

第1章 ゼロ写本とはいかなるものか

2018年3月に公開した Introduction aux études génétiques sur les Copies des Pensées de Pascal¹ において、『パンセ』のゼロ写本に関して新しい仮説を提出し、これまでジャン・メナールが仮説として指摘したものの、その存在の知られていなかったゼロ写本の一部のカイエ²を発掘し、提示した。

筆者の仮説は次のとおりである。パスカルの『パンセ』を初めて読みやすく書写したゼロ写本は、その後、ポール・ロワイヤル版を編纂する際にその編集用に使用されることになるが、ただし、ゼロ写本のカイエの中には、過度な加筆、その他の理由で編集作業の使用にたえない部分、または編集作業の妨げになる部分があり、その場合には、そのカイエ全体のコピーを新たに作成し、差し替えて、編集作業に使用した。この一揃いの写本が、のちに（1731年以降）一冊に合本されて第1写本³と命名された。

このことをあとづけるために筆者は第1写本の中から、3つのカイエ（« Pari », « Vanité », « Preuves de Moïse »）を取り上げた。

カイエ « Pari » は、明らかにパスカル自筆草稿の解読の跡を残しているものであるとメナールは指摘⁴しており、その通りである。しかし、その先で筆者はメナールと袂を分かť。すなわちメナールはこれをゼロ写本と第1写本を同時進行で作成した結果であると考えたのであるが、筆者はその解釈

* 京都産業大学外国語学部

は取らない。どうして同じ一人の筆写生 (Copiste) が、同時に2組の写本を作成し、しかもパスカル自筆の草稿から直接コピーしたものを偶然とはいえ2つの組にバラバラに分類したのであるのか。そして特に、ゼロ写本を作成する意図は、草稿の束がそのまま出版可能なものか否かを判断するためにパスカルが何を書いているのかをできる限り早く知りたいというものである。すなわち、そのままではとても読みにくいパスカルの手稿を読みやすく清書して、そのまま出版可能かどうか、早く点検したいというのに、余計な手間をかける余裕や必要があるのであろうか。

メナールが指摘した第1写本の「カイエ « Pari » は、明らかにパスカル自筆草稿の解説の跡を残している」事実を、このカイエが元々はゼロ写本を構成しているが故であると筆者は解釈する⁵。

カイエ « Vanité » にも、筆者は明らかにパスカル自筆草稿の解説の跡を見出した。カイエ « Pari » と同様に、このカイエも元々はゼロ写本を構成するカイエであると考え⁶。

カイエ « Preuves de Moïse » には、このカイエの最初のページの余白に « Ceci est écrit de la main de M. Constant » との加筆があるが、メナールは次のように指摘する。

« il s'agit là d'un pseudonyme bien connu de Nicole, dont la mère avait eu « Constant » comme nom de famille. Mais les pseudonymes, par prudence, changent souvent, et celui-ci n'est bien attesté qu'en 1661-1662, au temps des discussions de Pascal avec Arnauld et Nicole sur le formulaire. Le copiste n'a guère pu formuler sa mention que peu de temps après la mort de Pascal⁷ »

メナールのこの指摘はその通りであり、このカイエがパスカルの死ののち、ほとんど時をおかずに作成されたことを示している。

これらのカイエはもともとゼロ写本を構成していたものだが、このゼロ写本はのちにポール・ロワイヤル版『パンセ』出版の準備をする際に編集作業に使用される。カイエの中には、訂正修正の書き込みその他の事情でそのまま使用できないカイエがあったが、それらはそのカイエを書写し直し、一揃いの『パンセ』写本を準備して編集作業を行った。これがのちに製本されて、第1写本として現在に伝わったものであると考える。

このようにして、先の論文にて提出した筆者の仮説は、これまでの写本をめぐる謎の一部を説明できたと考えている。すなわち、メナールのゼロ写本が存在したに違いないという仮説は、誰も反対し得ないほどの論拠を持って示されているにも関わらず、ゼロ写本の存在や軌跡が全く知られて来なかったが、その存在を初めて示したことになる。

第2写本についても、一言加えたい。この写本は、ゼロ写本完成後1663年から遅くとも1664年までには、ゼロ写本から直接書写されたものである⁸。

ここで問題点を整理しておこう。

メナールが両写本の異同、つまり、誤写を比較調査した結果は、

- (1) 第1写本、第2写本は同系統の写本である。
- (2) どちらの写本も、一方的にいずれかが他方を写したことはあり得ない。

(例えば、第2写本は第1写本を写した、またはその反対)

- (3) 第1写本には、『パンセ』草稿を解読して書写した時にしか起こり得ない現象が存在する⁹。

この調査結果を受けてメナールが仮説として提出したことは、

- (4) (2)のことから、両写本にはその親写本が存在したはずであり、その親写本をゼロ写本と命名する。
- (5) (3)のことから、ゼロ写本と第1写本は同時並行的に作成された。

本研究に関係するメナール説は大体以上の通りである。

多くのパスカル研究者とともに、筆者も以上のうち(1)～(4)は、そのまま受け入れている。ただし(4)「第1写本には、『パンセ』草稿を解読した時にしか起こり得ない現象が存在する」ことの解釈についてメナールとは意見を異にする。メナールは(5)ゼロ写本と第1写本は同時並行的に作成されたと解釈することで、この現象を理解しようとするが、この見解はいかにも強引で理解しがたい。

筆者は、次のように考える。

パスカルの死(1662.8.19)後、すぐに最初のコピー(ゼロ写本)が作成された(1662-1663)。このコピーを検討して、ありのままの状態、パスカルの残した著作を出版するのは無理であると出版委員会は判断する。そこで、ペリエ家(パスカルの姉ジルベルトの嫁ぎ先でパスカルの遺産相続者)は、自家の蔵書用に第2写本を作成させる(遅くともペリエ家がパリの家からパスカルの全てのドキュメントを持って1664年にクレルモンに移るまでに成立している)。

1666年12月27日にフローラン・ペリエがパスカルの「*Fragment et Pensées*」の出版許可を取る。『パンセ』の出版準備(1667-1668)が始まり、ゼロ写本を編集作業に使用しようとするが、そのままでは不都合なカイエも存在し、それらはみな書写し直された。ここに60冊を超えるカイエの『パンセ』写本が揃い、これらのカイエを編集委員に回覧して出版の編集作業を進めるが、出版完了後、この一揃いのカイエはのちに一冊に製本され、初めは「写本」と呼ばれていたが、おそらくブランシュヴィックあたりから「第1写本」と呼ばれるようになった。

ここで筆者の出発点を整理しよう。

- (1) 第1写本、第2写本は同系統の写本である。
- (2) 第2写本はゼロ写本を書写したもので、若干の誤写はあるものの、ゼロ写本の状態をそのまま伝えている。
- (3) 第1写本は、次の2種類のカイエから構成されている。
 - ①ゼロ写本からそのまま受け継がれ、ゼロ写本そのものを構成していたカイエ。

②ポール・ロワイヤル版『パンセ』の出版準備の時にゼロ写本のカイエを写し直したカイエ。これらのカイエはゼロ写本の状態を再解釈して作り直された可能性も指摘できる。

(4)ゼロ写本はポール・ロワイヤル版『パンセ』の出版準備の時に整理され、その時点で現在の第1写本の状態になった。(すなわち、その時点でゼロ写本は第1写本に吸収されてしまったのであるから、ゼロ写本の存在が消えてしまったのは、道理である。)

(5)第2写本は、第1写本を書写したものではなく、親写本であるゼロ写本を書写したものであるから、第1写本より先に成立していなければならない。

(6)第2写本はゼロ写本の状態を忠実に写し取った唯一の写本である。

さて、先の論文で筆者は第1写本の中から、3つのカイエ (« *Pari* », « *Vanité* », « *Preuves de Moïse* ») を取り上げ、この3つのカイエは元々はゼロ写本を構成していたものであると結論づけることに成功した。

したがって、今後の筆者の課題は、第1写本に受け継がれたゼロ写本のカイエをさらに追求し、第1写本を構成する全てのカイエの出自を示すこと¹⁰であるが、本論文ではゼロ写本を構成していた1つのカイエを新たに提示¹¹する。これはこれまでのものとは異なり、草稿原稿が失われてしまい、写本にしかテキストが残っていないものである。これまで¹²扱ってきたものは、「草稿」原本の存在していたもののみであり、新しい試みである。

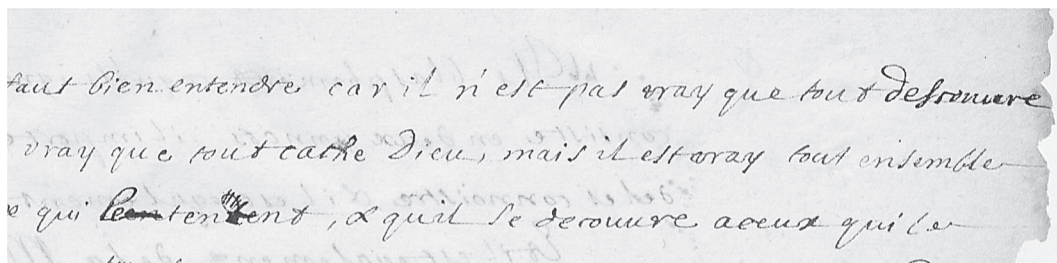
今回は、第1写本第1部のB(「目次にそって配列されていないファイル」¹³)からファイルB5を取り上げる。ここでも第1写本と第2写本の異本(*variantes*)を比較するという手法を用いる。

結論から言うと、このカイエは、かつてはゼロ写本を構成していたもので、そのまま第1写本に取り込まれたものであると考えることができると分かった。そこで第2章でその証拠を示し、第3章、4章でそれ以外の異本がその結論と矛盾しないかを検討するという手順を取ろう。

第2章 ファイルB5のカイエはゼロ写本のものである証拠

第2章では、第1写本の中から、ファイルB5を書写しているカイエを取り上げて、そこに、非常に読みにくい『パンセ』草稿からテキストを確立しつつ本文を書写する時にしか起こり得ない、すなわち、コピーから書写したのでは起こり得ない現象を指摘して、このカイエがもともとゼロ写本に由来するものであることを示したい。

1) 1C, p. 227 最上部 (部分)



(フランス国立図書館蔵, 以下 BNF と表示)

faut bien entendre car il n'est pas vrai que tout **descouure**

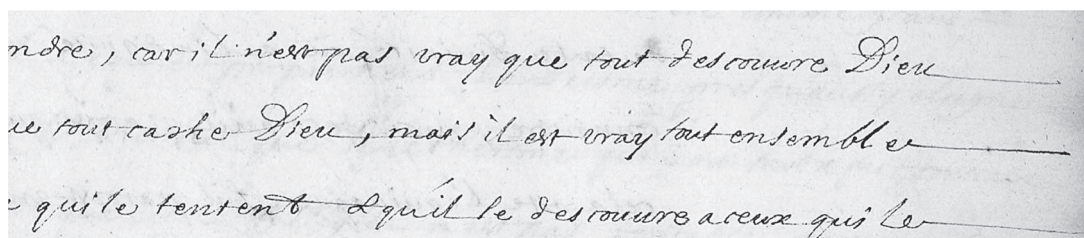
vray que tout cache Dieu, mais il est vrai tout ensemble

qui le|en|ten|d|tent, & qu'il se decouvre a ceux qui le

ここには2箇所の修正がある。

(1) 第1写本1行目文末にある「descouure」は他の筆跡とは明らかに違う¹⁴。3行下にも同じ文字「decouure」が見られるが、筆跡も綴字も異なる。これは筆写生がパスカルの草稿の文字が解読できない時にその文字分だけ空白にしておいて、後から校閲者(réviseur)がその空欄を埋めておくことによって、生じた現象と考えられる¹⁵。このようなことは、初めに草稿を読んでいる時にしか起きない。同部分を第2写本で見てみよう。

2C, p. 439 中段 (部分)



(BNF)

..., car il n'est pas vrai que tout descouure Dieu

.. tout cache Dieu, mais il est vrai tout ensemble

. qui le tentent & qu'il se descouvre a ceux qui le

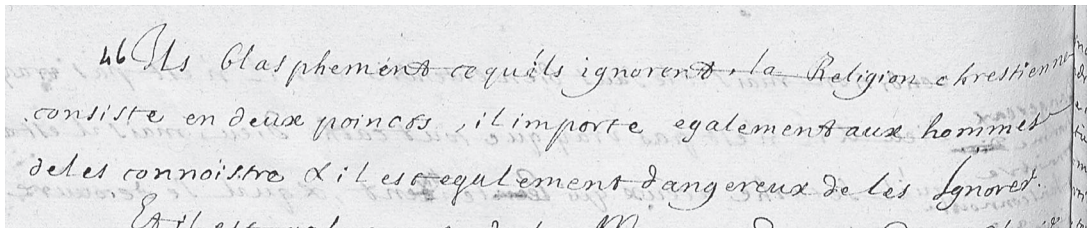
こちらでは何事もなかったように「descouure」と筆写している。第2写本のこのカイエは第1写本を写している。第1写本のこのカイエは明らかにゼロ写本を構成していたカイエである。その証拠はもう一つある。

(2) 第1写本3行目に注目しよう。ここに2つ目の修正の跡が見られる。初めに筆写生が「qui entendent」と書いていたが、「mais il est vrai tout ensemble qu'il se cache à ceux qui entendent」で

は意味が通らない。のちに、校閲者が「entendent」の前に「le」を加え、「entendent」のはじめの「en」を横線で消し、「d」の上に「t」を加筆し「le tentent」に訂正した¹⁶。このような作業もパスカルの自筆の草稿をはじめて解読する際にこそ起こりうる現象である。また、この修正もそのまま第2写本に受け継がれている。このカイエが元々はゼロ写本を構成していたことを示す証拠であるといえよう。

同じ現象が次の例にも見られる。

2) 1C, p. 228 最上部 (部分)



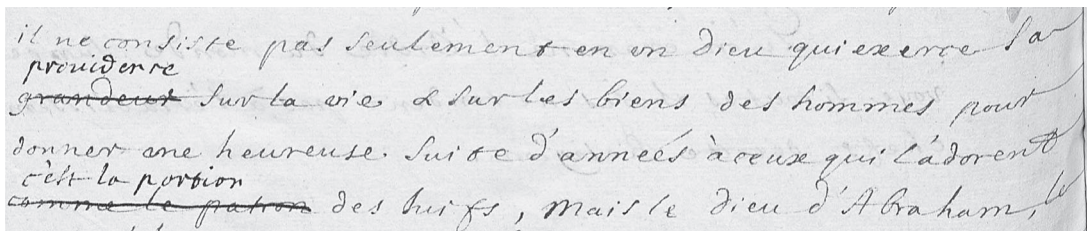
(BNF)

Ils blasphement ce qu'ils ignorent, la Religion chrestienne
consiste en deux poincts, il importe egalement aux hommes
de les connoistre & il est egalement dangereux de les Ignorer.

第1写本2行目から3行目にある「hommes de les connoistre」は他の筆跡とは異なり、より丁寧に慎重な書き方になっている。これは筆写生が読めず、その分空白を残しておき、校閲者が補った結果であろう。なぜこの語が読めなかったのか、残念なことに草稿が失われているので、その理由は不明である。この現象はパスカルの自筆の草稿をはじめて解読する際にのみ起こりうる現象である。このカイエが元々はゼロ写本を構成していたことを示す証拠であるといえよう。

第2写本については前の例と同様である。

3) 1C, p. 230 (部分)



(BNF)

il ne consiste pas seulement en vn Dieu qui exerce sa

prouidence

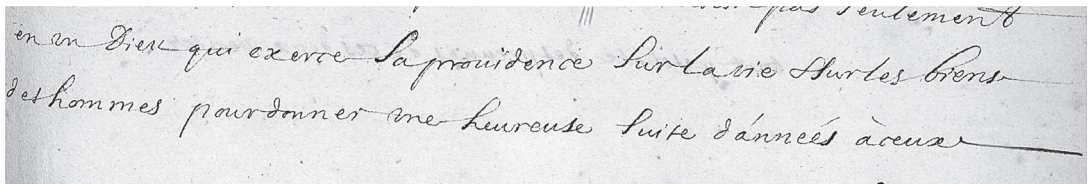
{grandeur} sur la vie & sur les biens des hommes pour

donner vne heureuse suite d'années à ceux qui l'adorent

c'est la portion

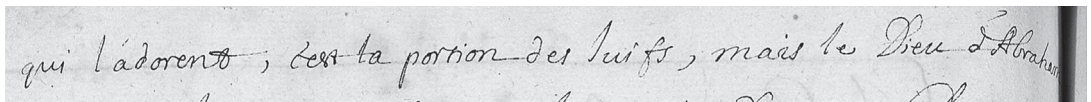
{comme le patron} des Juifs, mais le Dieu d'Abraham, le

2C, p. 443 (最下部分)



(BNF)

2C, p. 444 (部分, 第1行目)



(BNF)

en vn Dieu qui exerce sa prouidence sur la vie & sur les biens (p. 443)

des hommes pour donner vne heureuse suite d'années à ceux

qui l'adorent, c'est la portion des Juifs, mais le Dieu d'Abraham (p. 444)

第1写本では、筆写生は「qui exerce sa grandeur sur la vie [...] qui l'adorent comme le patron des Juifs」(下線筆者)と書写しているが、別の手で「grandeur」と「comme le patron」は横線で放棄され、すぐ上の行間余白にそれぞれ「prouidence」、「c'est la portion」と修正されている。

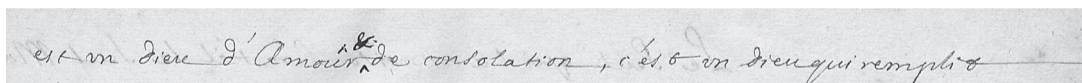
ところで、第2写本の同じ部分ははじめから、「qui exerce sa prouidence sur la vie [...] qui l'adorent c'est la portion des Juifs」(下線筆者)と書写されている。

第2写本はゼロ写本から直接書写されたものであり、ゼロ写本の本文は第2写本の本文と同じはずである。ところが第1写本の本文ははじめは異なって書写されている。これは、すなわちゼロ写本からの書写ではない。言い換えれば、『パンセ』草稿からの直接の書写といえることができる。この筆写生の読み間違いを、校閲者が訂正をして、その本文を第2写本が写したのである。

この加筆訂正も、次のような結論を導き出している。すなわち、このカイエはもともとゼロ写本を構成するものであると。

なお、第1写本の次のページ (p. 231) 第1行目上余白に見られる « & » の加筆も以上の2つの加筆と同じ手で一連の訂正が行われたものである。参考のために該当部分の写真を掲載しておく。

1C (p. 231, 第1行目)

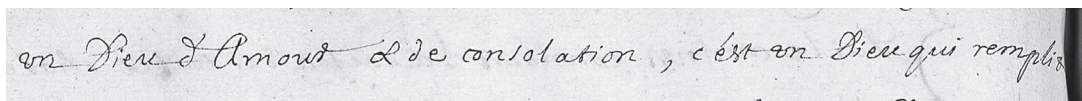


(BNF)

^ &

est vn dieu d'Amour ^ de consolation, c'est vn dieu qui remplit

2C (p. 444, 第3行目)



(BNF)

Vn Dieu d'Amour & de consolation, c'est vn Dieu qui remplit

この加筆された « & » は一文字ではあるが、この一文字のあるなしで、意味はかなり違う。第2写本は間違いなく写している。

以上の例はいずれもこのカイエが『パンセ』草稿を解読しながら作成されたものであることを証言してくれるものである。したがって、現在は第1写本を構成しているこのカイエは、元々はゼロ写本を構成していたものであると考えられる。

第3章 ポール・ロワイヤル版出版準備のための編集時の加筆・修正

第1写本は、ポール・ロワイヤル版出版準備のための編集作業に使用されているので、そのための書き込みもある。これらは言うまでもなく第2写本には取り入れられていない加筆修正であり、この写本独自の加筆修正である。第3章では、これを指摘しよう。

1)

1C, p.225

Homere fait vn Roman qu'il donne pour tel, & qui est receu pour tel, ~~car personne ne doutoit que Troye, & Agamemnon n'auoyent non plus esté que la pomme d'or~~ il ne pensoit pas aussy a en faire vne histoire mais seulement vn diuertissement; Il est le seul qui

(BNF)

Homere fait vn Roman qu'il donne pour tel, & qui est receu pour tel, [car personne ne doutoit que Troye, & Agamemnon n'auoyent]
[non plus esté que la pomme d'or] il ne pensoit pas aussy a en faire
vne histoire, mais seulement vn diuertissement; Il est le seul qui

2C, p.437

fait vn Roman qu'il donne pour tel & qui est receu pour tel, car personne ne doutoit que Troye & Agamemnon n'auoyent non plus esté que la Pomme d'Or, il ne pensoit pas aussy a en faire vne histoire, mais

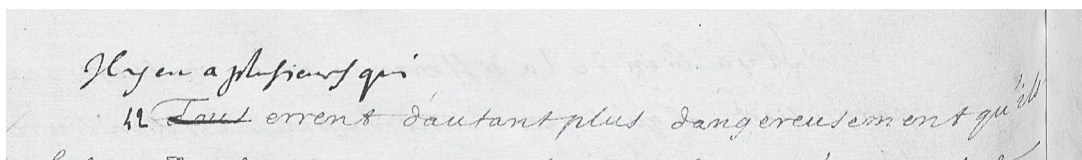
(BNF)

fait vn Roman qu'il donne pour tel & qui est receu pour tel, car personne
ne doutoit que Troye & Agamemnon n'auoyent non plus esté que la
Pomme d'Or, il ne pensoit pas aussy a en faire vne histoire, mais

両者を比較すると第1写本では「car personne ne doutoit que Troye, & Agamemnon n'auoyent non plus esté que la pomme d'or」の一文が横線で放棄されている。ただし、第2写本ではこの放棄はない。第2写本はゼロ写本の忠実なコピーであることから、第2写本がゼロ写本をコピーした時には、この放棄は存在していなかったことを証拠づけている。したがってこの放棄はポール・ロワイヤル版『パンセ』出版に向けての編集作業時になされたものと判断できる。

2)

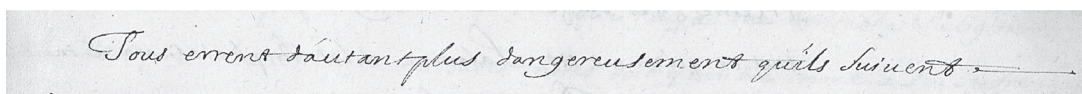
1C, p. 226



(BNF)

*Il y en a plusieurs qui**Tous errent d'autant plus dangereusement qu'ils*

2C, p. 439



(BNF)

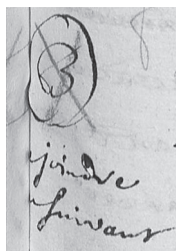
Tous errent d'autant plus dangereusement qu'ils suivent

第1写本では、「Tous」を横線で放棄して、上の行に「Il y en a plusieurs qui」の加筆が見られる。第2写本ではこの修正はない。第2写本がゼロ写本をコピーした時には、この修正は存在していなかったことを証拠づけている。したがってこの修正はポール・ロワイヤル版『パンセ』出版に向けての編集作業時になされたと判断できる。

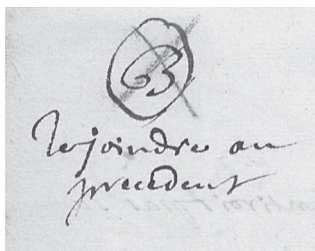
このほか、第1写本のこのカイエには、印刷用語でいう「réclame」（編集のためなどの指示）も記入されている。これらは、ポール・ロワイヤル版『パンセ』出版のための編集作業で記入されたものである。いくつか例を挙げておく。例2には、「次のものと一緒にする」、例3には、「前のものと一緒にする」と注記されている。



例1



例2



例3

(3点とも BNF)

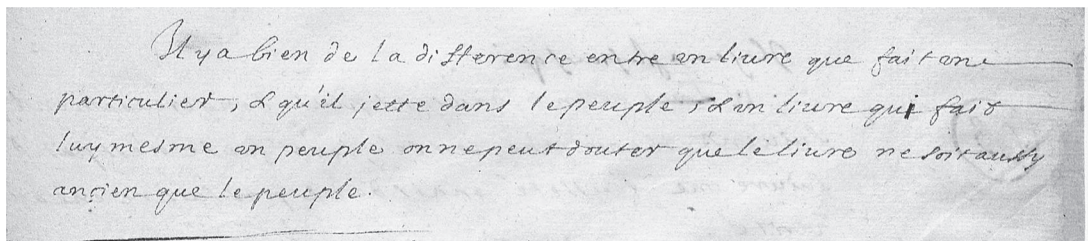
この章で取り上げたものは、すべてフローラン・ペリエがパスカルの《Fragments et Pensées》の出版許可を得た1666年12月27日以降、すなわちポール・ロワイヤル『パンセ』出版のための編集作業中に加筆されたものであり、写本群（0C, 1C, 2C）の生成過程では最終段階の加筆である。したがって、第2章で導いた結論に反するものは何もない。

第4章 それ以外の加筆・修正

次に、それ以外の加筆・修正について検討して行こう。

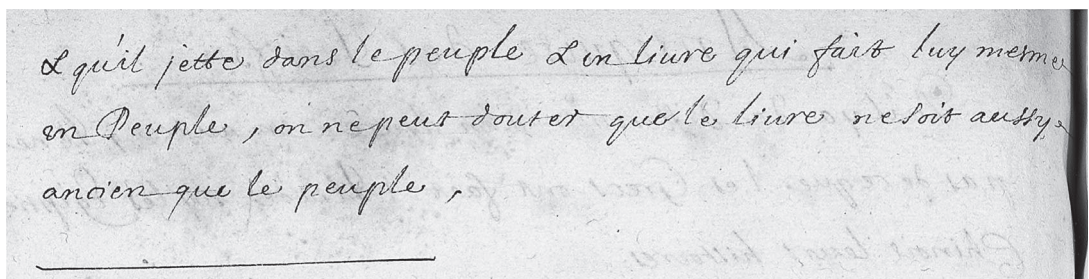
1)

1C, p.225



(BNF)

2C, p. 438



(BNF)

ここでは第1写本2行目後ろから2つ目の単語の修正が興味深い。筆写生は《liure que fait》と書いたが、筆跡も筆致も違う別の手で《que》のeの上からiを重ねて《qui》と訂正している。第2写本でははじめから《qui》と写している。このファイルにはパスカルの手になるオリジナルの草稿が失われているのではあるが、《qui》が正しい。理由は、別の『パンセ』断章（SEL716）に次のような一文が見出されるからである。

« Différence d'un livre reçu d'un peuple ou qui forme un peuple. »

この修正はこのカイエをどのように理解するかに従って、次の2通りに解釈ができる。

①このカイエはゼロ写本を書写したもので、書写する際に間違えて「que fait」と写されたが、後で「qui fait」と修正された。

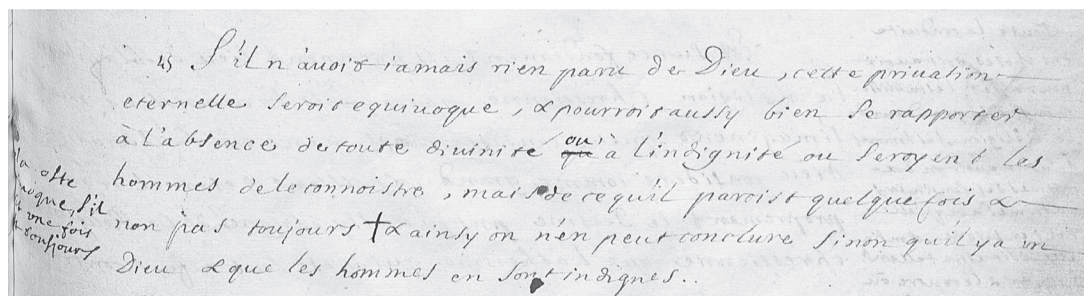
②このカイエはゼロ写本のもので、パスカルの「草稿」を解説する際に、筆写生が「que fait」と間違っ
て写したが、校閲者が「qui fait」と修正した。

この修正だけ見ると、以上の2通りの解釈ができ、この加筆修正情報からは、このカイエはどちらの可能性も主張できる。しかしすでに第2章で論じたように、このカイエはもともとゼロ写本を構成するものであり、したがって、②の解釈が正しい。

これと同じケースが次の修正である。

2)

1C, p.227



(BNF)

ou

+ cela oste	à l'absence de toute diuinité {qu'} à l'indignité ou seroyent les
l'equiuoque s'il	hommes de le connoistre, mais de ce qu'il paroist quelquefois &
paroist vne fois	non pas toujours + & ainsy on n'en peut conclure sinon qu'il y a un
il est toujours	Dieu & que les hommes en sont indignes

2C, p. 440

S'il n'auoit jamais rien paru de Dieu cette priuation
seroit equiuoque & pourroit aussy bien se rapporter à l'absence
de toute Diuinité ou à l'indignité ou seroyent les hommes à
connoistre, mais de ce qu'il paroist quelque fois & non pas toujours
cela oste l'equiuoque s'il paroist vne fois il est toujours & ainsi
on n'en peut conclure sinon qu'il y a vn Dieu & que les hommes
en sont indignes.

(BNF)

S'il n'auoit jamais rien paru de Dieu cette priuation et (ernelle)
seroit equiuoque & pourroit aussy bien se rapporter à l'absence
de toute Diuinité ou à l'indignité ou seroyent les hommes (de le)
connoistre, mais de ce qu'il paroist quelquefois & non pas toujours
cela oste l'equiuoque s'il paroist vne fois il est toujours & ainsi
on n'en peut conclure sinon qu'il y a vn Dieu & que les hommes
en sont indignes.

ここでも、先の例と同じく、本例単独では、2通りに解釈できるが、すでに第2章で論じたように、このカイエはもともとゼロ写本を構成するものであり、次のように考えてよい。

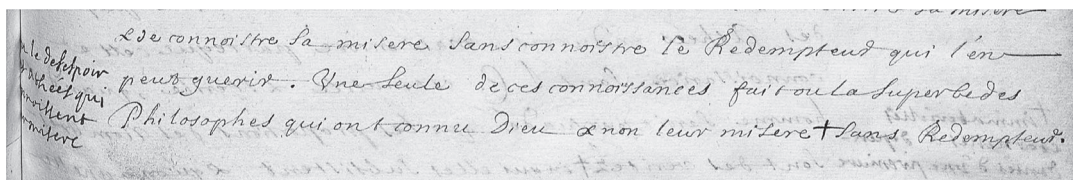
第1写本の1つ目の修正は写真版3行目、活字転写では1行目に見られる。筆写生ははじめ「toute diuinité qu'à l'indignité」と書いたが、あとで校閲者が「qu'」を横線で消し、この行の上側行間に「ou」と訂正した。

第1写本の2つ目の修正は写真版5行目、活字転写では3行目に見られる。これは写本研究で用いられる用語で、「Saut du même au même」と言われる間違いである。筆写生は、「mais de ce qu'il paroist quelquefois & non pas toujours + & ainsi on n'en peut conclure sinon qu'il y a vn Dieu」と書写している。そして、「non pas toujours」と「& ainsi」の間に挿入記号「+」が加筆され、その紙面左余白には、挿入記号「+」に引き続き「cela oste l'equiuoque s'il paroist vne fois il est toujours」と加筆がある。この筆跡は明らかに第1写本全体の筆写生のものとは異なり、校閲者のものである。第2写本は「mais de ce qu'il paroist quelquefois & non pas toujours cela oste l'equiuoque s'il

paroist vne fois il est toujours & ai(nsy) on n'en peut conclure sinon qu'il y a vn Dieu & que les hom(mes) en sont indignes. » (下線筆者) とこの修正を受け入れて筆写されている。すなわち第1写本の加筆は第2写本成立以前のものであるから、加筆は、ゼロ写本作成時、すなわち初めてパスカルの「草稿」を解読しながらゼロ写本を作成した際の痕跡である¹⁷。

次も « Saut du même au même » のケースである。

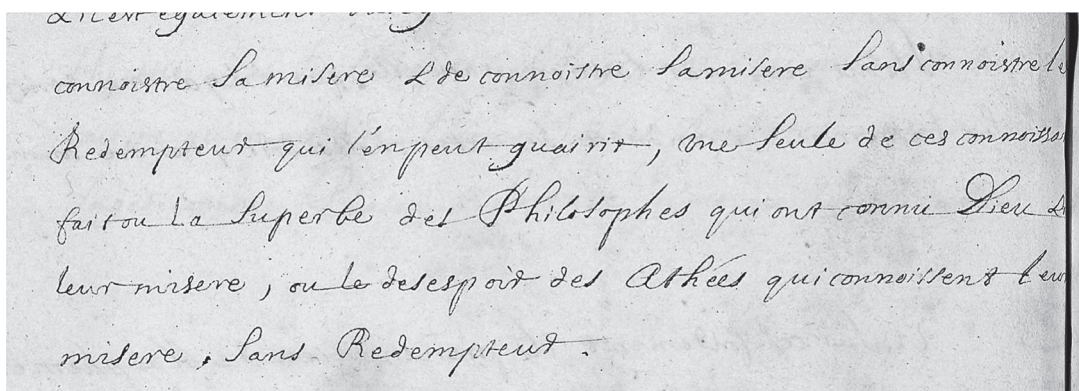
3) 1C, p. 229 (部分)



(BNF)

+ ou le desespoir	& de connoistre sa misere sans connoistre le Redempteur qui l'en
des athées, qui	peut guerir Vne seule de ces connoissances fait ou la superbe des
connoissent	Philosophes qui ont connu Dieu & non leur misere + sans Redempteur.
leur misere	

2C, p. 442 (部分)



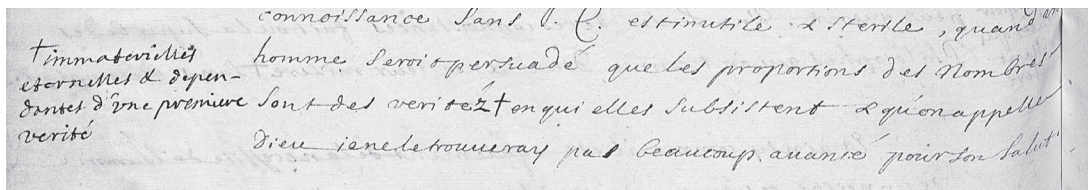
(BNF)

connoistre sa misere & de connoistre sa misere sans connoistre le
Redempteur qui l'en peut guairir, vne seule de ces connoissa(nces)
fait ou la superbe des Philosophes qui ont connu Dieu & (non)
leur misere, ou le desespoir des Athées qui connoissent leur
misere, sans Redempteur. (下線筆者)

第1写本の筆写生は、ここでも「Saut du même au même」（同じ語から同じ語へのジャンプ）の過ちを起こしてしまっている。校閲者が左余白に修正を書き入れている。第1写本の筆写生ははじめて『パンセ』草稿を解説するときに、1つ目の「misere」まで書写して、次に2つ目の「misere」の後から読み始めてしまっている。ここでもこれまでの結論を繰り返すことができる。

次の例は、3) で取り上げたものと同じケース（「Saut du même au même」の過ち）ではあるが、一つ別の要素（単数から複数への変更）が加わっているので、簡単に説明する。

4) 1C, p. 230 (部分)



(BNF)

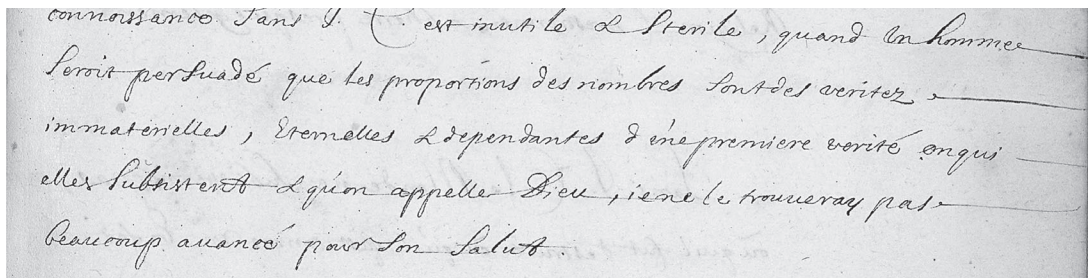
+ immateriales
eternelles & depen-
dantes d'une premiere
verité

homme seroit persuadé que les proportions des Nombres

sont des veritez + en qui elles subsistent & qu'on appelle

Dieu ie ne le trouueray pas beaucoup auancé pour son Salut.

2C, p. 443 (部分)



(BNF)

seroit persuadé que les proportions des nombres sont des veritez

immateriales, Eternelles & dependantes d'une premiere verité en qui

elles subsistent & qu'on appelle Dieu, ie ne le trouueray pas

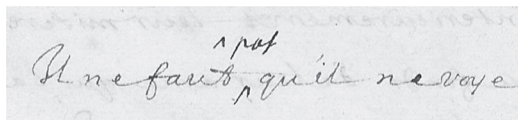
beaucoup auancé pour son Salut.

第1写本では、パスカルの草稿上の「les proportions des nombres sont des veritez immateriales, Eternelles & dependantes d'une premiere verité」（下線筆者）の部分解説している際に、筆写生は、2つの「verité」の間で「Saut du même au même」の過ちをおかし、「les proportions des nombres

sont de verité en qui elles subsistent » と記している。これを校閲者は « les proportions des nombres sont des veritez ± en qui elles subsistent » (下線筆者) と複数に訂正して、さらにその後に挿入記号 « + » を記し、欄外に « immaterielles eternelles & dependantes d'une premiere verité » と加筆して訂正している。この訂正したものを第2写本は書写している。

次の例は少し複雑である。

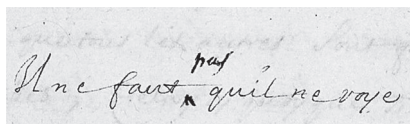
5) 1C, p.232 (BNF)



^ pas

Il ne faut ^ qu'il ne voye

2C, p.445 (BNF)



pas

Il ne faut ^ qu'il ne voye

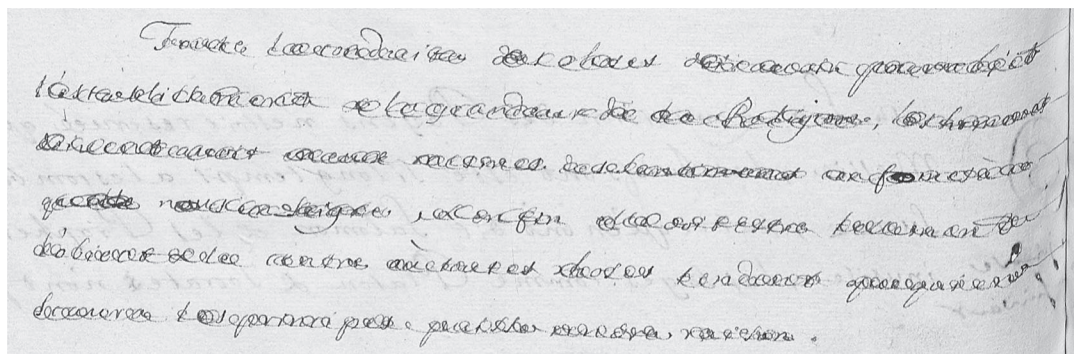
一見すると、両方とも後から挿入記号の « ^ » と « pas » が後から加えられているように見える。しかし、よく見ると第2写本の « ^ » と « pas » は、筆写生がはじめから第1写本の配置そのままに写していて、後から別の手が上をなぞっていることがわかる。

第1写本では、明らかに違う手、校閲者の手で « ^ » と « pas » を加筆している。

この章でこれまで取り上げた第1写本の全ての加筆修正は、その加筆単独では判断できないものの、第2章の結論と矛盾するものではなく、全て、筆写生が書写したテキストを校閲者が訂正したものと考えてよいものであった。

ところで、小論中に取り上げていない加筆修正が1箇所ある。それは筆写生によって、本文中央部に一度は書写されたテキストが放棄され、同じ手で、欄外余白に再び書写されているものである。この加筆修正は、むしろこのカイエがゼロ写本であることを証明しているのではないか、したがって第2章で取り上げるべきか迷ったのであるが、ここに追加して記しておく。

5) IC, p.228 (中央)

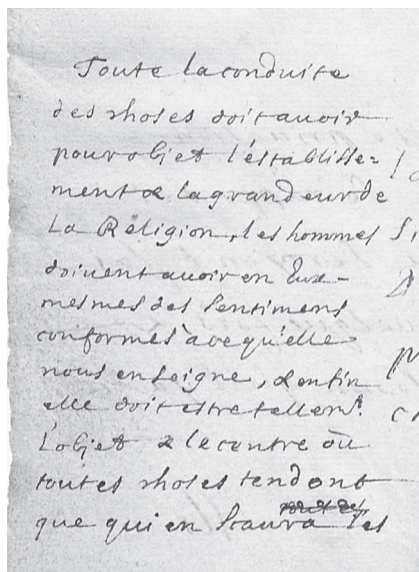


(BNF)

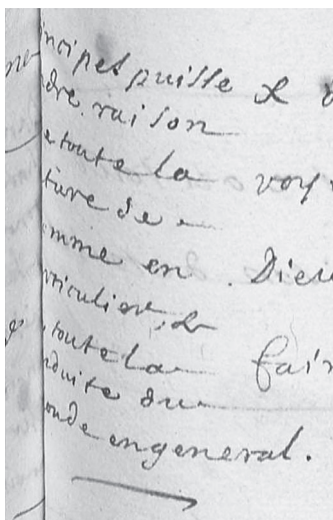
{Toute} {la conduite} {des choses} {doit auoir pour objet}
 {l'etablissement} {&} {la grandeur} {de} {la} {Religion}, {les hommes}
 {doient auoir} {en eux} {mesmes} {des sentimens} {conformes à ce}
 {qu'elle} {nous enseigne}, {& enfin} {elle doit estre} {tellement}
 {l'objet & le} {centre} {où toutes} {choses} {tendent} {que qui en}
 {saura} {les principes} {puisse} {rendre} {raison.}

このテキストは正確に書写されているにも関わらず、写真でわかるように、くるくると全て塗りつぶされている。同じテキストが左下余白に同じ筆写生の手で書き直され、さらにその続きのテキストが補われている。

1C, p.228 (左下余白)



toute la conduite
des choses doit avoir
pour objet l'établissem-
ent & la grandeur de
la Religion, les hommes
doivent avoir en Eux-
mesmes des sentimens
conformes à ce qu'elle
nous enseigne, & enfin
elle doit estre tellement
l'objet & le centre où
toutes choses tendent
que qui en saura les

1C, p.229 (左上余白¹⁸)

principes puisse
rendre raison
& de toute la
nature de
l'homme en
particulier, &
de toute la
conduite du
monde en general.

(イタリックは筆者)

余白部分の加筆には、中央部に一度書かれ、くるくると消去されたものと同じ文が記され、さらに « & de toute la nature de l'homme en particulier, & de toute la conduite du monde en general. » と付け足されている。しかもこの余白の加筆は中央部分と同じ手で、筆写生のものである。

どうしてここでそのような煩わしいことを行つたのであろうか。

一般的にパスカル自筆の「草稿」では、欄外の加筆であっても、本文に組み込まれている場合には多くの場合どこに挿入するか送り記号 (Signe de renvoi), または指示が付されている。この場合両

写本の筆写生はその順番を尊重して、用紙の中央部に続けて書写していく。

ところが、例えば、断章「想像力」の草稿 p. 369 の左右余白に一連のかなり長い加筆があるが、この加筆がどこに入るべきかパスカルは何の指示も与えていない。

この部分の両写本の書写の仕方をみると、両写本ともこの一連の文書をどこに挿入するか指示のないまま、左余白に記している。

写本の筆写生は、草稿の状態をできる限り、尊重して書写していることがわかる。

我々の問題に戻ろう。はじめにも記したように、第1写本のこのカイエに登録されている断章のパスカル自筆の草稿は失われているので、確認することはできないのであるが、この部分の加筆修正は、筆写生が挿入記号のない本文をそのまま中央部に書写して、途中まで書いたところで、欄外に記さなければならないことを思い出して修正し、余白に書写し直したものであろう。そうであるとするならば、第1写本のこのカイエは、読みにくい「草稿」を解読しながら書写した証拠の一つともいえよう。

結論

『パンセ』第1写本、「第1部「写本」によって伝えられる〈パンセ〉」中の「目次にそって配列されていないファイル (= カイエ)」の中から、5番目のカイエを取り上げて調査した。このカイエは3、4番目のものと一緒で、草稿が失われてしまっている。しかし、第2章で示したようにこのカイエには、別の写本を元に書写されたなら起こらないこと、さらに言えば、「草稿」原稿を解読しながらでなければ起こらないことが起こっている。このことからこのカイエは元々はゼロ写本を構成していたカイエであったが、ポール・ロワイヤル版を編纂する際に準備された一連の写本に組み入れられ、そのまま第1写本として製本されたものであることが推測される。第3章以下では、第2章で取り上げた加筆修正を除き、このカイエに存在するあらゆる書き込みを取り上げ、この結論にそぐわないものがないか検討をした。まず第3章では、ポール・ロワイヤル版を編纂する際に加えられた加筆をまとめて取り上げた。これは写本の編纂史では一番最後に加えられた加筆である。次に第4章では、各書き込み単独では書き込みの時期が特定できないものを扱い、これらの書き込みが第2章の結論には反しないことを明らかにした。

このカイエは、元々ゼロ写本を構成していたカイエであったと結論できる。

【注】

- 1 M. Horino, *Introduction aux études génétiques sur les Copies des Pensées de Pascal*, p. 356, 京都産業大学論集. 人文科学系列 第51号 2018年3月
- 2 ここで、第1写本の装丁について若干の説明を加えたい。各ファイルはそれぞれ一つのカイエに書写されている。「cahier」というフランス語は一般にはノートを指すが、ここではむしろ日本語の印刷用語の「折帖・折丁」に近い。第1写本では数枚の紙を重ね、真ん中で半分に折ってカイエを作り、一つのカイエに一つのファイルを筆写している。しかし、各カイエは『パンセ』の各ファイルの文章の量がまちまちであるので、文章の量にしたがってカイエの紙の構成枚数はまちまちである。第1写本の「cahier」と「折帖・折丁」は、結

果的には同じ形状のものを指すが、作成のプロセスは異なる。「折帖・折丁」はあくまで印刷したものをページの順になるようにそろえて折って、天と小口を裁断したもので、大きな紙を折っていることから「折」帖・「折」丁と呼んでいると思われるので、本論中では「折帖・折丁」を使わず、カイエとフランス語をカタカナ書きにする。

- 3 第1写本は60冊を超えるカイエから成り立っている。
- 4 J. Mesnard, *AUX ORIGINES DE L'ÉDITION : LES DEUX COPIES*, p. 15, in *Les « Pensées » de Pascal ont trois cents ans*. Bussac, 1971.
- 5 M. Horino, *Op. cit.*, p. 356
- 6 同上, p. 358
- 7 J. Mesnard, *Op. cit.*, p.23
- 8 詳細は M. Horino, *Op. cit.* 参照。
- 9 メナールは第1写本の中に本来ならゼロ写本作成時にしか起こらない現象を持つカイエが混ざっていることを説明する必要があった。第1写本に『パンセ』草稿を解読して書写した時にしか起こり得ない現象を持つカイエは本来ゼロ写本にしかありえない話である。この矛盾を回避するためにゼロ写本第1写本同時成立説(5)が編み出された。草稿から直接書写したカイエとそのカイエからコピーしたカイエの2種類がゼロ写本と第1写本に混ざって配置されたとかなり強引に仮定している。(J.Mesnard, *Op. cit.*, p.15)
- 10 その後、大阪大学大学院在籍の小林愛斗氏の研究、筆者自身の探求により、幻のゼロ写本をかつて構成していたカイエが続々と発見されつつある。これらは順次フランス語で発表して行く予定。
- 11 本論文は、いずれフランス語で発表する *Introduction aux études génétiques sur les Copies des Pensées de Pascal* (II) において、第1写本の3つのカイエについてもともとゼロ写本を構成していたものであることを論ずることになるが、それに先駆けてそのうちの一つをここに日本語で発表するものである。
- 12 M. Horino, *Op. cit.*
- 13 本論中では『パンセ』内部の構造を指し示す名称は、塩川徹也東大名誉教授の翻訳した岩波文庫版『パンセ』の呼称に従う。
- 14 (Site de CIBP) Le réviseur a [...] ajouté le mot descouvre [...] dans C1.
- 15 J. Mesnard: *Op. cit.*, p. 14. « [...] des blancs laissés à la place de mots non lus. Ces blancs ont été ensuite remplis d'une autre main, non encore remarquée, quoiqu'elle intervienne tout au long du volume ».
- 16 (Site de CIBP) Le réviseur [...] a corrigé qui *entendent par qui le tentent* dans C1.
- 17 先に触れたように、この加筆単独では、ゼロ写本のカイエでは第2写本と同じように « mais de ce qu'il paroist quelquefois & non pas toujours cela oste l'equivoque : s'il paroist vne fois il est toujours & ainsy on n'en peut conclure sinon qu'il y a vn Dieu & que les hommes en sont indignes » と書かれていたが、第1写本のこのカイエ作成時に « Saut du même au même » をおかしてしまったと主張することもできる。しかし、すでに論じたように、第1写本のこのカイエは、ゼロ写本を構成していたカイエである。本文で論じたように理解するのが妥当である。
- 18 写本の製本の綴じ糸が強すぎて、左側は不完全にしか見えない。

Studies on *Copies* of *Pensées de Pascal*

Masamitsu HORINO

Abstract

In his studies on *Copies* (the *First* and the *Second Copy*) of Pascal's *Pensées*, Jean Mesnard advanced a hypothesis that looked into the riddle of the creation of these copies: after the death of Pascal, there had been made, concurrently with the First Copy arriving until now, a primary copy that Mesnard named the *Zero Copy*. In spite of his indisputable inferences, no one could't find any debris of the *Zero Copy*.

In my previous paper « Introduction aux études génétiques sur les *Copies* des *Pensées* de Pascal », examining his hypothesis, I arrived at another hypothesis, that made me find some pieces of this *Zero Copy* and I published them for the first time.

In this paper, I will add on yet another piece of the *Zero Copy* that I have found after the publication of my previous paper.

Keywords : Pascal's *Pensées*, *Original des Pensées*, *Zero Copy*, the *First Copy*, History of the creation on the tree *Copies* of *Pensées*

Études génétiques sur les *Copies* des *Pensées de Pascal*

Masamitsu HORINO

Résumé

Dans ses études sur les *Copies* de *Pensées* de Pascal, Jean Mesnard a émis une hypothèse sur leur genèse : après la mort de Pascal, avec la *Première Copie* qui nous est parvenue, on avait parallèlement confectionné une copie primitive que Mesnard a nommée la *Copie Zéro*. Mais, malgré ses raisonnements incontestables concernant la *Copie Zéro*, personne n'en a retrouvé même la moindre parcelle.

Dans notre dernier article « Introduction aux études génétiques sur les *Copies* des *Pensées* de Pascal », en examinant l'hypothèse de Mesnard, nous sommes arrivés à une autre hypothèse, qui nous

a amené à retrouver quelques morceaux de cette *Copie Zéro* et nous les avons publiés pour la première fois.

Dans le présent article, nous en donnerons encore un autre morceau que nous avons retrouvé après la publication de notre dernier article.

Mots clés : *Pensées* de Pascal, *Original des Pensées*, *Copie Zéro*, la *Première Copie*, Histoire génétique des *Copies of Pensées*